

## はじめに

「心の働きの総合的研究教育拠点」(京都大学心理学連合)(京都大学、D-2)は、2002(平成14)年度文部科学省21世紀COEプログラム拠点形成事業として採択され、2002年10月より、活動を開始した。

人間社会は今日未曾有の変革を遂げている。電子技術の進歩による高度情報化社会、生活形態の変化と医療の飛躍的進歩とがもたらした少子高齢化社会、地球規模に発展した環境破壊、想像を絶する速さで変化するこの状況に、人の心はあえぎ、引き裂かれようとしている。このような時代である今こそ、人の心の本質を知り、人の心を導くことのできる新しい知の体系が求められている。我々は、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学としての心理学を統合し、新世紀にふさわしい融合科学としての心理学を構築し、その成果を国内外に広く発信することを通して、この時代の要請に応えたい。

歴史的経緯から、京都大学においては、心理学関連講座が文学研究科、教育学研究科、総合人間学部、人間・環境学研究科、高等教育教授システム開発センター、情報学研究科、霊長類研究所などといった多部局に分散して配置されている。本事業においては、これら心理学関連講座で実施されている諸研究および教育システムに有機的な連携を与えることにより、新たな心理学の世界的研究教育拠点 京都大学心理学連合 を構築することを計画した。その作業を通して、急速な社会的変化がもたらした諸問題を解決していくための新たな視座を確立するとともに、統合的な研究教育環境において、基礎から臨床に至る広い視野を持った次代を担う人材を育成し、もって人類の将来に資することを目指す。

実をいえば、このような作業は突如として始まったものではない。我々は30年の歴史を重ねる京都大学心理学教官連絡会(P S I)を通じて、部局間の連絡を密にし、研究教育面における相互の協力体制を維持し続けてきたのである。国内のみならず、世界的に見ても、基礎心理学系と臨床心理学系は、同じ心理学という学問名称をいただきながら、まったく別個の学問分野かと思いがうほどの乖離を示す現状に鑑みると、京都大学における心理学の独自性がよく理解されよう。

もちろん京都大学においても実験系と臨床系では手法も考え方も大きく異なっている。それぞれの内部においても、研究者それぞれの価値観が水と油ほどにも異なっている場合もある。しかしながら、京都大学においては、そのような多様性こそが尊重され、その中で協調しつつも切磋琢磨していく伝統が、あまたの独創性あふれる研究を生んできたのである。我々はこの伝統により培われた京大心理学の独自性を、これを機会にさらに飛躍的に発展させたいと考えている。

本冊子は、本事業第1年度における活動実績をまとめたものである。本事業の計画調書に記載された内容の抜粋に続けて、シンポジウム、研究会、その他の活動等の記録、10月以降の研究業績一覧、及び若干の既公開・未公開の論文を巻末に収録した。記載および収録された研究論文は、必ずしも直接的に本事業の補助を受けたものだけではないが、京都大学心理学連合としての活動を知っていただく意味で掲載したものである。

なお、本拠点の活動に関する情報は、以下のURLに公開されているので、ご参照いただければ幸いです。

<http://www.psy.bun.kyoto-u.ac.jp/COE21/>

2003年3月10日

拠点リーダー・藤田和生

# プロジェクトの内容

## プロジェクトの目的

21世紀は「心の時代」になるであろう。情報化社会によるグローバル化や少子高齢化など、人類がかつて経験したことがない状況が急速に到来している。物質文明の進歩が人間の幸福に直結しないことも明確になり、未来の予測が困難な中、人々の心は乱れ、さまざまな社会的問題を生んでいる。このような時代において心理学の責務は大きい。この緊急かつ重要な責務を果たすべく、我々は、実験科学、フィールド科学、臨床実践科学の連携により、融合科学としての心理学を志向し、新たな知の方法論を切り拓くとともに、未来を展望できる21世紀の人間観を創出し、それらを国際社会に向けて具体的に発信する。

後述のように、京都大学においては、認知心理学、発達心理学、比較心理学、社会心理学、脳科学、臨床心理学等のあらゆる分野において優れた研究・教育をおこなってきた。国際的学術誌への論文掲載、学術書の出版、若手研究者の育成はもちろん、各種科学研究費の他、未来開拓学術研究推進事業、科学技術振興調整費などの大型研究プロジェクトにおいても中心的な役割を果たしてきた。多数の国際共同研究が継続的に実施されており、その活動は国内外に高い評価を得ている。

しかし京都大学の心理学における最大の特色は、その相互の協調体制にある。心理的諸機能の認知科学的・脳神経科学的研究からフィールド心理学的研究、動物を対象とした比較認知研究に加え、年間5800件を超える心理相談を行っている臨床実践活動に至るまで、多様な心理学領域を専門とする40名に近い研究者が、教育・研究両面での柔軟な相互作用によって、独創的成果を生みだしてきた。これは西田哲学や今西学派などの独自の基盤を持ち、個性や多様性を重んじつつ互いに協調し切磋琢磨していく京都大学なればこそその特色といえる。

すでに我々は、30年以上の歴史を持つ心理学教官連絡会という月例の会合を通じて、常に情報を交換し、学術的交流を深めてきた。2000年には日本心理学会を共同で開催し、翌年には同連絡会編の書籍（「21世紀の心理学に向かって - 京都大学の歴史と現状 - 」ナカニシヤ出版）を出版した。教育面では、数多くの講義を相互履修可能な共通科目に指定し、学部学生や大学院学生が部局超越的な指導を受けられる体制を作ってきた。本拠点形成計画において、我々はこの伝統をさらに飛躍的に発展させ、現在多数の研究科に分散している関連講座を束ね、ヴァーチャルな研究科のように機能する連合組織 - 心理学連合 - を構想した。

このような部局超越的な教育・研究環境のもとで、今後5年間に取り組むべき共通の問題空間として下記に挙げる3項目を設定する。この問題空間に対し、実験からフィールド、臨床に渡る多様なアプローチにより相互に連携しつつ研究を推進し、欧文による学術論文や書籍の公刊、国際シンポジウム、定期的な研究者、大学院生の相互国際交流などを通じ、心理学の世界的研究拠点として、その成果を発信する。またその成果を踏まえた臨床実践活動を通じて、広く社会に資する貢献を目指す。さらに、言語学、社会学、人類学、精神医学といった隣接領域との相互作用により、より総合的な人間学への道をも探る。

## プロジェクトの視点

今後5年間の研究を収斂させるため、我々は「心を知り、心をはぐくむ」という共通テーマを設定した。このテーマが構成する問題空間には、図1に示す3つの下位空間がある。

### 1. 自然的現実との相互作用：心の基礎的構成要素はどのような生物学的起源をもち、システムとして統合されているのか（図1右）

心の生物学的基盤に関わる問いの総体である。生物としての人は物理的環境と人的環境に取り巻かれている。これら環境内の事物の認識、他者や集団、文化との関わりなどがこの問いに含まれる。これら諸過程を決定する環境的・個体的要因を同定し、その相互関係を明らかにすることが中心課題である。

### 2. 社会的現実との相互作用：人の心は他者との関係においていかに生成され、社会的現実の中でどのような在り方をするのか（図1左）

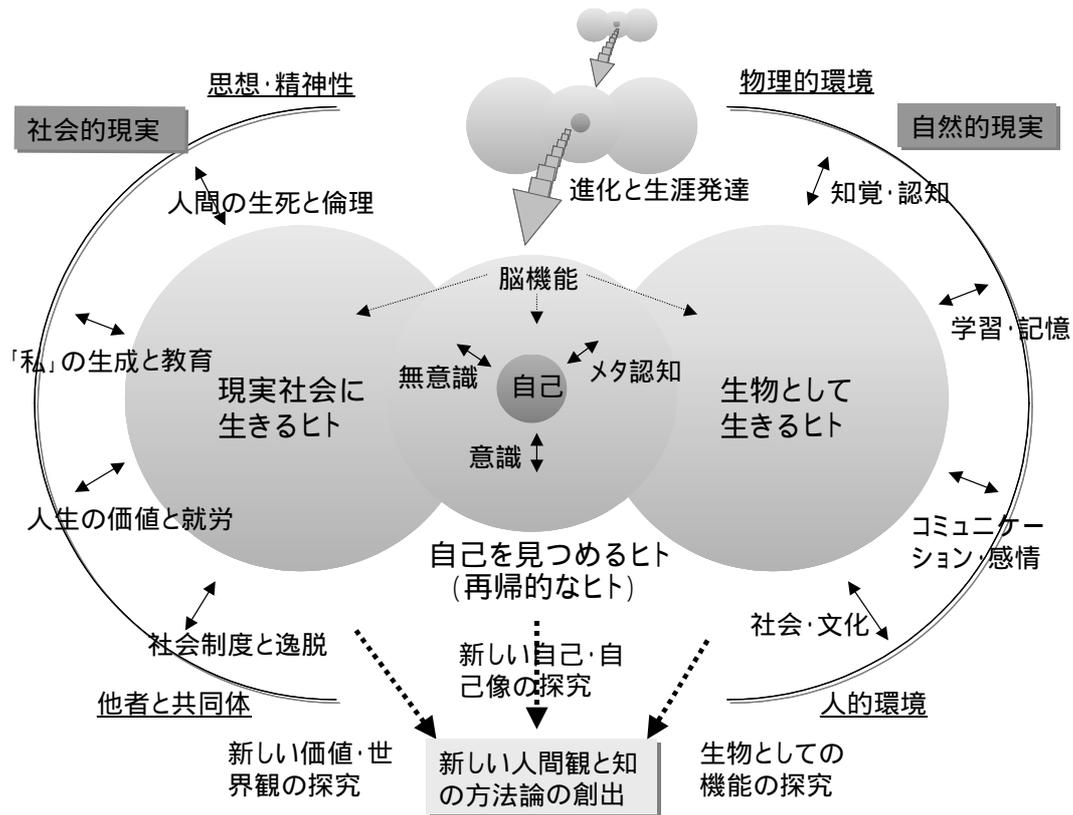
他者の中に生まれる人は、常に変化する文化・社会・歴史的環境の中に生きており、それに対応するよう求められる。その対応様式の解明や、制度や規範といった社会的現実に対応しきれない場合に生じる問題とその対処法のみならず、人が現実社会に働きかけていく心の過程についても、心理臨床実践からの知見を基盤にして検討する。

### 3. 内的現実との相互作用：自らの営みを再帰的に反省する自己理解の様相と働きは何か（図1中央）

人において最も発達している自己モニタリング機能、自己意識に関わる問いの総体である。自己は自身の内部に存在する第3の環境ともいべきものであり、人は常にそれを生みだし、またそれと相互作用しつつ行動を決定している。人の最大の特徴とも言えるこの自己との相互作用はいかにして形成されるのか、実際いかに機能しているのか。これらを明らかにすることがこの問いの中心課題である。

さらに、これら3つの心的機能は、必然的に時間を追って変容してゆく。経験による短期的な変化から、数十億年に及ぶ生命の進化史に至る、異なる時間尺度における発生過程の理解なくしては、動的変容を遂げる個体や民族、さらには種全体の心の性質を正しく理解することはできない。また、あらゆる心的機能は、その神経系によって実現される。したがって、これを実現する脳機能の解明も必然的に重要課題として位置づけられる。

このように、心が投げかける問題は多様でかつ複雑である。この広大な問題空間の総体を、我々は「心の宇宙」と名づけ、この空間内に個々の研究課題を位置づけることにより、心の総合的理解を目指す。



【図1】心の宇宙

## 研究課題の設定

最重要課題として、上記3つの下位問題空間に以下の4研究課題を位置づけ、個々の課題を推進するとともに、それら相互の関連性を解明することを通じて、心の働きの総合的理解を目指す。各項目の下には、この課題に含まれる研究を例示する。1～3の数字は前記の下位問題空間に対応する。

### A. 「イメージと表象の性質と機能」

チームリーダー： 苧阪

サブリーダー： 大山\*、齋藤

メンバー： 江島\*、岡田\*、皆藤\*、梶井、河合、楠見、齋木、櫻井、田中\*、鶴田\*、友永\*、藤田、藤原\*、船橋、やまだ、山本\*（五十音順、\*研究協力者）

心の内部に構成されるイメージや表象は、環境や社会や自己の認識の基盤を提供する。例えば事物の認識は感覚器官から手に入れた刺激と主体が持つ内的表象の照合過程である。記憶再生は、過去経験を心的表象として再構成することである。また社会・文化的に構成されたイメージや表象は、人の思考や感情を方向づけ、行動を組織する。人は内的自己と表象とを対話させ、それにより過去の経験を反芻し、現在の行動を決定し、将来の行動を計画する。心を制御する最大の要因である表象やイメージは、いかにして形成され、いかなる性質を持ち、いかに

機能するのか、またそれは脳内でいかに実現されているのか。これらは心の基礎的機能を理解する上でもっとも重要な課題である。

A - 1 . 物体認知や記憶、言語、心像操作などに作用する表象の性質や機能を、実験心理学的手法により分析し、それに関与する脳内部位を fMRI、光トポグラフィなどの非侵襲的手法により明らかにする。

A - 2 . 夢、描画、箱庭、イメージ、語り等の臨床研究、事例研究、フィールド研究、調査研究を通して、心の深層の表出と変容を心理療法との関連で解明し、また人生生成過程や社会文化的表象の視点から解明する。

A - 3 . 心の理論、メタ認知、自己意識、無意識など、この問いの核心に含まれる諸過程の性質、成り立ち、脳科学的背景を解明する。

## B . 「身体化される心」

チームリーダー： 伊藤

サブリーダー： 蘆田、松村

メンバー： 板倉、乾\*、梶井、河合、黒川\*、桑原、内藤、山中、吉川（五十音順、\*研究協力者）

心の諸機能はすべて身体において実現されている。身体を離れて心は形成されず存在し得ないという認識は、近年心を理解するための新たな枠組みとなりつつある。例えばボールの大きさや形や重さは、それを持つ手の開き具合や筋緊張を通して認識される。また主体の内部に構成された社会的身体と生物学的身体の整合性を保持することは、人が社会的存在として生きるための基礎を提供する。基礎的外界認識における心身の相互作用を実験心理学的に分析するとともに、身体疾患における心理的側面の解析、遺伝子治療、移植医療などに関わるカウンセリング等の実践から、医学や自然科学への提言につなげる示唆を得る。

B - 1 . 基礎的外界認識における心身の相互作用を分析し、事物の脳内表現の解明や工学的・応用的モデルの作成をおこなう。また1対1、1対多間の非言語コミュニケーション信号（表情、視線等）の認知・情動処理および身体的応答反応に関し、行動実験、脳活動計測等の手法によりコミュニケーションの媒体としての身体表出とその認知過程の特徴を明らかにする。

B - 2 . 身体疾患における心理的側面の解析、遺伝カウンセリングの実践等から、医学の進歩に直面しての人間主体の心理的なあり方の重要性を解明し、心理療法的介入の可能性を検討する。合同事例検討会等、医療機関と双方から研究員を派遣する形で連携して研究を進める。

B - 3 . 内在化された社会的身体と生物学的身体の不整合による奇妙な感覚の成立機序を分析する。例えば体感異常幻覚、心気妄想、幻肢などがその例である。

## C . 「文化・社会的環境との相互作用」

チームリーダー： 北山

サブリーダー： 桑原、杉万\*

メンバー： 東山、松沢\*、吉川、渡部（五十音順、\*研究協力者）

心というシステムは、人自らが歴史的に作り上げてきた環境の中で機能する。人を取り巻く環境は人が自身を社会の中に定位する枠組みを提供する。近年極めて基本的な認知にも、主体がその心を培ってきた環境の影響が存在することが示されている。こういった深甚な社会や文化の影響は、いまだ十分に理解されているとは言えない。一方、社会的現実と向き合う主体にとっては、文化・社会的な環境とその急激な変化に対応できないことから、様々な心理的問題

- が生じてくる。臨床的実践を通じて、このような問題の解決を探っていくことが急務である。
- C - 1 . 社会文化的に構成される、自己観、人生観、動機づけ、認知様式等の文化差や個人差を、主として比較文化的アプローチから実証的に分析する。
  - C - 2 . グローバル化や技術文明の進歩などの急激な文化・社会的変化をもたらす、行動化や犯罪化をともなった心理的諸問題に対し、臨床的な対処法を検討する。その際に従来の心理療法の枠を超えて、少年院施設等から研究員を受け入れ研修させたり、逆に施設に研究員を派遣して事例検討会を行うなどにより、司法、教育の現場とも連携し、またその臨床的実践から、社会や制度の問題を解明し、提言していく。
  - C - 3 . 行動規範、価値観、倫理などの内在化された社会的環境と自己意識、人格、気質、帰属意識、集団行動などとの関連性を、主として調査研究により明らかにする。

#### D . 「進化と生涯発達」

チームリーダー： やまだ

サブリーダー： 板倉、田中\*

メンバー： 遠藤\*、子安、友永\*、橋彌、藤田、松沢\*、溝上\*（五十音順、\*研究協力者）

あらゆる心の働きは時間軸に沿ってダイナミックに変化する。特定の心的機能に関するモデルは、その機能の時間的变化をも予測可能であるべきである。系統発生と個体発生の過程を、進化的比較、世代間比較、生涯発達比較等を通して明らかにする。臨床実践においても幼児期からの生育史やライフストーリーは問題行動の理解と治療に重要である。臨床実践と生涯発達をアクティブに連結し、説得力のある社会政策や教育政策を提案する。心の発生過程を理解することなく、心の将来を正しく予測することはできない。

D - 1 . 広範な動物を対象に、知覚、記憶など多様な心的機能を行動的に分析するとともに、乳幼児の知性の発達や、生涯にわたる人や諸動物の心的機能の変遷を実証的に明らかにし、比較する。また類人猿などを対象に、萌芽の文化と認識の相互関係についても実験室・野外研究の両面から分析を進める。

D - 2 . 乳幼児期から老年期までの生涯発達、死生観や人生観、親子関係や世代間関係を臨床事例、フィールド研究、調査研究から明らかにする。様々な発達課題と個々の人がどのように向き合い、その背景にはどのような心理的な動きがあるのかを、臨床実践を含めて心理学的に解明する。

D - 3 . 乳幼児及び諸動物における心の理論、メタ認識、自己意識などを分析し、これらの相互関係について実証する。成人と比較することを通じて、人の独自性を明らかにする。

#### 教育課題

次代の心理学を担う独創性に富む人材を育成するため、大学院教育に関する諸改革を実施する。大学院教育に関する主たる施策は、研究活動を支援するカリキュラムの新規開設、研究指導の部局超越化、及び、現在多部局に分散して実施されている大学院教育カリキュラムの統合と、それに伴う基礎教育カリキュラムの共通化である。共通科目の設定、心理学セミナー（懇話会）、国際セミナー等、その一部はすでにおこなわれているが、これをさらに大規模な統合へと発展させたい。これらを通じて、広い視野を持ち、基礎心理学と臨床心理学の双方を深く理解し、京都大学の独自性を持って世界最先端で活躍する人材を養成する。この教育システムにより、

我々は、基礎と臨床が融合した心の総合的理解を、さらに確実なものへと進展させたい。なお、これらはいくまで教官は個々の部局・講座に所属したままで実施されるヴァーチャルな心理学連合の新規教育活動であり、組織改編や教務事務処理の改変を伴うものではない。関連講座は以下の通りである（\*は協力講座）。

文学研究科<行動文化学専攻・心理学専修>

教育学研究科<教育科学専攻・教育認知心理学講座、教育方法学講座>/<臨床教育学専攻・心理臨床学講座、臨床教育学講座>

人間・環境学研究科<人間・環境学専攻・環境情報認知論講座、人間形成論講座、自然環境論講座>

高等教育教授システム開発センター<大学教育評価システム講座\*、大学教育課程講座\*>

情報学研究科<知能情報学専攻・生態認知情報学講座\*>

生物科学研究科<霊長類学専攻・思考言語分野\*>

現在計画されている具体的施策は以下の通りである。

#### (1) 大学院生の研究活動に関わる施策

- 1 - a ) 心理学のセミナーの開設 心理学連合所属の教官が自らの研究成果を報告し、教官及び大学院生が討論する場を設定する。独創性ある心理学研究の最先端に触れさせることにより、大学院生の動機づけを高め、報告と討論の成果を自らの研究に活かす機会を提供する。
- 1 - b ) 国際大学院生交流の推進 特定の海外の研究拠点を定め、本心理学連合に在籍する大学院生と当該研究拠点の大学院生との相互留学制度を整備する。
- 1 - c ) 国際心理学セミナーの開催 海外の一流研究者を招聘し、学外に開かれたセミナーを開催する。
- 1 - d ) 心理学懇話会の開催 大学内外の関連研究者を招き、学外に開かれたセミナーを開催する。
- 1 - e ) アカデミックイングリッシュコースの開設 国際的発信能力を高めるためには、英語によるコミュニケーション能力が必須である。そのような能力をつけさせるため、外国から講師を招聘して演習やワークショップをおこなう。  
これ以外の計画について、現在検討中である。

#### (2) 講義・単位に関わる施策（大学院）

カリキュラムおよび研究指導の統合に向けて、現在、具体的施策を検討中である。

#### (3) 学部学生の教育

カリキュラムおよび研究指導の統合に向けて、現在、具体的施策を検討中である。